

3年1組

 トカラヤギのトカちゃん一家との3年目の暮らし
 ～4匹の赤ちゃんの誕生。3匹の雄ヤギとの別れ～


「今のトットは本当に幸せなの？」

3年間暮らしを共にしてきたトカちゃん。そのトカちゃんの出産動画を提示すれば、子どもたちから出産を終えたトカちゃんへの労いや、感謝の言葉、赤ちゃんの可愛さに対しての言葉が溢れる明るい時間になるのではないかと考えていました。ですが、一頻り動画を見終わると、子どもたちはすぐに生まれたばかりの3匹の雄の赤ちゃんの去勢について話を始めました。

そして、その去勢の判断について、子どもたちの大きなよりどころになっているのは、昨年6月のトットの去勢でした。

「トカちゃん、トット、ララの3匹が、家族一緒にくらしていくことを大事にしたい」と決めていったトットの去勢。ですが、H君は「今、長野小で過ごしているトットは本当に幸せなの？」と問いを投げかけました。

改めて、今のトットの暮らしを見つめていくと7匹家族になり、同じ小屋ではくらしているものの、ケンカをしないようにと仕切られた部屋の中で1匹で過ごしています。自然体験園で散歩をしている時、トットは他のヤギたちとは少し離れて草を食べていることが多いのです。また、どうしても赤ちゃんヤギに意識が向いていく中で、トットのお世話がおざなりになっている部分がある事も見えてきました。

そんな中、散歩中のトットが長野小の敷地から出て行ってしまったということもありました。「交尾のできない、自分の家族が持てないトットは、もっと自由がほしいんじゃないかな」話し合せてトットの今の姿からその背景を想像していく中で、涙を流しながらトットへの思いを語っていくMさんやAさん。「トットは、もうどこへ行っても交尾はできない。長野小でも、どこの牧場に行っても、それはもうどうしようもない」「だからこそ、赤ちゃんヤギたちの去勢は、できるだけ早くに決めてあげることが大切。お別れをすると決まっても、「ほしい」と言ってくれる先がすぐに見つかるとは限らないから。一番大切に考えなきゃいけないのは『命』だから」そうして語られていく言葉からは、生まれたばかりのヤギたちとの別れへの決意も見えました。



「さびしいけど、悲しくはない」

「別れを惜しみ、トラ、トト、クロ（お別れする3匹の雄ヤギ）の出発を泣くこともあるのかな」「涙を流してのお別れになるのかな」など、別れの場面について、様々な想像をしていました。ですが、実際のお別れの場面、子どもたちは落ち着いていました。

「バイバイ、元気でね」「たくさん交尾してトットの遺伝子を残してね」など、3匹に思いを伝え、トラックに載せられる姿を見守っていく子どもたちの姿は、別れを前向きに捉えている印象でした。たしかに寂しさを感じている様子はあるものの、悲しくて仕方がない、という姿は見られません。

走り去っていくトラックを見送り、教室に戻って振り返りを綴っているときの子どもたちも、思いの外、落ち

着いています。私は、「先生さ、もっと悲しくなるかと思ったんだけど、実は今、あまり悲しくないんだけど…」と、自分の心の内面を子どもたちに正直に伝えました。すると、

「メリーランド（預け先）のお世話は自分たちのお世話よりちゃんとしていて、プロだと思った。だから、安心してお願いできた。寂しいは寂しいけど、そんなに悲しくはなかった」（Yさん）

「『大切にしてくださいね』ってお願いしたら『もちろん』って答えてくれたから安心した」（Kくん）

「無理だと思っていたのに、3匹のことを名前でも呼んでくれる、大事にしてくれるって言っていた」（Mさん）

「今日のお世話を精いっぱい頑張れたから、すっきりした気持ちでお別れができた」（Aさん）

こうして、話を聞いていても、子どもたちから「悲しさ」のようなものは感じません。ですが、子どもたちは間違いなく別れに向き合っており、一人ひとりが自分の言葉で今の心境を語っていました。

別れが決まってからの1か月、子どもたちは今まで以上に精一杯お世話に取り組んでいました。もしかすると、こうした中で、3匹と別れる心の準備が少しずつ、ですが着実に進んでいたのかもしれない。

また、別れについて話し合いを何度も重ねた中で、今回の別れが3匹の未来に繋がる肯定的な別れ、前向きな別れであることに確信があったのかもしれない。子どもの姿から「別れの意味」について様々なことを私自身が考えさせてもらいました。そして、学級で飼育している動物との「別れ」には、「わたしにとっての別れ」の意味が、子どもたちそれぞれにあるのだという事を感じました。

今後、トラ、トト、クロの3匹のいなくなったトカちゃん一家とくらす子どもたちの姿には、どのような変化が生まれていくのでしょうか。また、3匹の雄ヤギと共に7匹のヤギたちとくらすわずか2か月の日々には、どんな意味があったのか、子どもたちと考え続けていきたいと思います。

